

P3-56.**当施設におけるドナー腎摘出術**

(外科学第五)

○木原 優、中村 有紀、今野 理
横山 卓剛、城島 嘉麿、濱 耕一郎
岩本 整、葦沢 龍人、松野 直徒
長尾 桓

(国際医療福祉大学熱海病院 移植外科)

唐仁原 全

(東京女子医科大学 腎臓外科)

中島 一朗

深刻なドナー不足によりわが国では生体腎移植が主流となっている。腹腔鏡手術の進歩により、ドナー腎摘術も腹腔鏡下で行われるようになった。当施設でも2003年7月より腹腔鏡用手補助下ドナー腎摘術を導入し2008年4月までに60例を経験したので報告する。

男女比は男:女25:30、平均年齢は52.7+/-11.8歳。BMIは平均22.4±3.9であった。摘出腎は1例のみが右腎摘出。腎重量の平均は170.1±37.5g、手術時間は167.9±39.2分。出血量は平均38.1+/-43.2gで全例に輸血は必要としなかった。ドナーの退院時のCrは1.1±0.3mg/dlであった。平均温阻血時間は4.2+/-1.8分。退院までは平均13.2±4.9日を要した。

平均当施設の結果は他施設とも遜色なく、従来の腎摘出術より出血量が少なく、術後の入院期間が短縮された。従来の腎摘出術より、安全、かつ低侵襲という面、ドナーの手術が低侵襲であることがレシピエントのストレス軽減につながる面からも腹腔鏡ドナー腎摘出術は有効といえる。

P3-57.**アルツハイマー型認知症における塩酸ピオグリタゾンの脳機能へ及ぼす影響**

(大学院三年・老年病学)

○佐藤 友彦

(老年病学)

羽生 春夫、平尾健太郎、金高 秀和
櫻井 博文、岩本 俊彦

【目的】 糖尿病は脳血管性認知症のみならずアルツ

ハイマー型認知症 (AD) の発症や進展に関与することが知られている。近年の研究では高血糖や高インスリン血症、インスリン抵抗性を含む代謝要因がアルツハイマー型認知症の病変を促進するという報告もある。本研究ではインスリン抵抗性改善治療薬である塩酸ピオグリタゾンを使用して認知機能や脳血流に及ぼす影響について研究した。

【方法】 対象は2型糖尿病を合併したAD患者。従来治療群とピオグリタゾン治療群に無作為に分類し、治療前、治療3ヶ月後、治療6ヶ月後に神経心理検査(ADAS-Jcog、MMSE、FAB、DST、VF)、SPECTを施行し治療前後の経過を観察した。

【結果】 糖尿病合併患者における認知機能に関して、MMSE、FAB、VFではピオグリタゾン群と従来治療群で有意差は認めなかった。ADAS-Jcogでは従来治療群では悪化を示したのに対してピオグリタゾン群では改善傾向、WMS-Rではピオグリタゾン群では有意に改善を示した。SPECTでは従来治療群では側頭葉の血流低下傾向を示したのに対して、ピオグリタゾン治療群では前頭葉、頭頂葉の脳血流の改善を認めた。

【結論】 塩酸ピオグリタゾンの投与により認知機能、脳血流の改善傾向を認めた。この機序としてインスリン抵抗性の改善だけでなく本薬剤のもつPPAR-γ作用のAD病理に及ぼす改善作用などが考慮された。

P3-58.**インスリンアスパルト注射導入後に高インスリン血症を認めた1例**

(大学院二年・内科学第三)

○島 順子

(内科学第三)

伊藤 祿郎、志熊 淳平、石田 順子
三輪 隆、能登谷洋子、小田原雅人

(皮膚科学)

加藤 雪彦

インスリンアスパルト(ノボラピッド)は従来のヒトインスリン製剤に比べ、インスリン抗体産生はきたしづらいものと考えられている。今回、我々はヒトインスリン製剤からインスリンアスパルトへ変更後に高インスリン血症を認め、インスリン抗体陽性を認めた症例を経験したので報告する。